

最後の純粋人類が太陽系を去るのを機に、新宇宙暦は〈後太陽暦〉と改められた。彼らは最後に青い母星に降り、地球基準時間を凍結すると、新暦に合わせた全域時軸調整を滞りなくすませ、永遠の星空へと巣立っていったのである。

あとに残されたのは猫であった。

人類の主要都市のほとんどが地球外の宇宙ステーションに移った数世代前にはすでに、人工知能搭載のアンドロイドや感覚・知性拡張を受けた広義人類の人口は、純粋人類のそれを上回っていた。

猫もまたその広義人類の一部と見なされて久しい。海洋植物と藻類を除く植物との正確な意思疎通も成功の兆しが見えていたこの時代、猫属は広義人類課税と脱法猫カフェの取り締まり強化に対する反発によるストライキを繰り返していた。しかしながら猫属の職務に対する怠慢な姿勢は旧時代より根深く、純粋人類の理解と諦めもあったため、それはそれとしてなまあたたかく受け入れられていたのである。

猫はどこまでいっても猫だった。

それは他生物に関しても言える事ではあったのだが。しかし奔放な気質のまま毛糸玉で

遊ぶかのように最先端技術を扱うそのさまは、天才的とも冒瀆的とも言い難い、独特の勢いに満ちみちていた。

猫工宇宙マグロ（食用・動力源としての応用も可）の開発や薬物を用いないナノマシンによる体毛汚染防止コート剤の発明など、多種属にも有用な技術を提供したかと思えば、海王星系会議の席で鳥属派議員に向けて『これ以上の会議延長は真冬の夕暮れにするひなたぼっこ以下の生産性しかないのが分からないのかこの鳥頭』などの差別的発言を繰り返した。一時的に会議への参加権限を凍結されるなど、なかなかニューースの多い種属であった。外部評価にこころ折れるような種属ではなかったから、懲罰期間中の態度もいたって堂々としたものだったと記録には残されている。

猫と人類の距離は近くも遠くもならなかった。

彼らは相変わらず純粹人類の目を引き、愛らしさに惑わせ、やきもきさせるような存在のままであった。宇宙進出時代の初期から惑星移住船に乗った猫より地球および月に残ったものの数が多い事と、それによって移住船に乗るのを諦めた純粹人類が少なからずいた事からもそれは読み取れる。

第壹軌道塔の製造でその名をさせた技術者フジシマヒオミの設計図面裏に残された詩篇〈猫哀歌〉は、そういつた歴史を学ぶ時には必ず出てくる有名なエピソードだ。ままならない彼の愛猫への親愛と悲しみは、太陽系脱出への布石のひとつとなれるはずだった男の人生をも歪めてしまった。愛を貫いただけです、とは晩年の彼の言葉である。地球での技術開発を続けはしたものの、彼は結局愛猫とその子孫たちと地球で暮らし、ついに月より遠い場所に行く事はなかった。

現在もフジシマヒオミの愛した猫ケダマの子孫たちは、第一軌道塔記念館に勤めている。

勤めているとは言っても、大体は観光案内者と称し記念館の入り口あたりでゴロゴロとしているだけではあるのだが。

そうして、たくさんの生き物が母なる青い星から巣立ち、あとには猫が残された。

悲しむ事は何もない。何も残ったのは猫だけではないのだ。とは言うものの、広義人類のほとんどは別惑星の大規模都市に暮らしている。あれほど過密を極めていた青い星も、今はどこことなくがらんとした静けさをたたえていた。

「でもあんまり、さびしくはないよね」

シロミミは口元の洞毛をそよがせて、耳と尾の跳ねるリズムでそう呟いた。

風はまだ冷たかったが、まぶしさを増した日差しは暖かく春の訪れを感じさせるものだ。第貳拾軌道塔は白く輝きながら空へ伸びている。

猫の隣で風光観測を終えた二足車両型の「Oα改良型へクロアシ」は、通信パネルをたまたみながらこたえた。

「何がですか」

「ヒトがいないこと」

「ああ……まあ、あなたはそうヒト恋しいたちではありませんしね」

曖昧な香りがため息のようにそう告げた。

「クロアシはさびしい？」

「多少」

鈍い哀惜の香りの中に、彼の主人に対する思いを垣間見て、シロミミはつられてさびしくなった。

クロアシは昨年の頭に製造技術者を亡くしたばかりなのだ。老齢の広義人類であった。

九十二歳という短命ではあったのだが、延命器官の移植を受けていない者としては長寿と呼んでも差し支えないものだったらしい。それでもクロアシにとって、それはあまりにも早過ぎる別れだった。

あの時のクロアシの悲しみようを思い出すと、身体のどこか深い場所が痛み出すような気がして、シロミミはちぢこまってしまふ。

私の人工知能を停止させて彼女と同じ送戸炉に入れてくださいと悲痛な香りで訴えたクロアシの姿に、涙した技術者は多かった。悲しみにふけるクロアシを落ち着かせるのに二週間はかかっただろうか？ 人工知能らしい冷静さを取り戻してからも、クロアシには悲しみの影が付きまとっている。

定時制の職務に就く事がほとんどない猫属のシロミミが、彼と共に施設の定期巡回業務に就いているのには、そういったわけがあるのだった。

5 シロミミは自分をなだめるようにゴロゴロと喉を鳴らした。そしてふと、クロアシもこの音に少なからず安堵する事を思い出し、暖かな岩の上から彼の背の上に駆け上がる、そこでまたゴロゴロと喉を鳴らした。

空はどこことなく黄色く霞んではいるが、今日の陽光は心地よい。

「前日比較と送信やっておくから、クロアシ、旧ドームに向かつて。ギンジロさんに会いに行こう」

「送信ならもう済んでます」

「じゃあ旧ドームに向かうだけでいいよ」

「はいはい」

呆れたような排気でクロアシはこたえた。そして、ゴツゴツとした砂礫の山を器用に歩み出す。

遠くどこまでも、砂礫の丘と旧都市の廃墟が建ち並んでいる。薄青い消化藻類が、とりわけ高い鉄筋コンクリートのビルいちめんへばり付いていた。耳がちりちりするような音が彼らの活発な働きを知らせてくる。そうしてひと月もまかせて置けば、百メートル程度のビルであればきれいさっぱり黒い土へと変えてくれるのだ。

けれど、この島に残されたこれら旧都市のすべてを植物の生息に適した土壌へと変えるには相当な時間がかかるだろう。ひとつのビルを溶かしたところで、毎日軌道塔から降ろされてくる衛星ゴミで相殺されているようなものなのだ。

「カリカリ用意してくれればいいなあ」

「ギンジロさんにそう通信すればいいじゃないですか」

「言わなくても用意してくれたほうが、なんかうれしいんだよー」

「そのワガママはよく分かりません」

クロアシがいつもの調子に戻ってきたのを感じて、シロミミはより楽しげにゴロゴロと喉を鳴らした。

雲は遠く、風はこれからおさまるだろう。しばらくは晴れの日が続く。監視鳥官が軌道塔の周辺を飛び交っている以外には、空に生き物の気配はない。

かつては地球上に最も多く生息した陸生節足生物は、広義人類よりもはるか以前に銀河系を脱し、もはやこの宇宙のどこに生息域を移したのか定かではなかった。

広義人類により発展を遂げた機械文明であったが、しかしその恩恵をもっとも受けたのは彼らである。

7
陸生節足生物はその身の内に、人類がもうひとつの頭脳とした電子回路をいち早く取り込むすべを得た。知性拡張と種属内での小規模な電子戦争を繰り返し、ついに異種知性間

——つまり純粹人類との完全な意思疎通を成功させたのだ。

人類が受け取ったもうひとつの知性からの最初の言葉は「〇」と「一」により構成されていた。ほどなくあらゆる地域の言語を持ち寄り、彼らは友好の意と、そして近い別離の予告をネットワークに放流した。半年後、彼らは予告の通り地球上の八十六トンの鉱物資源と六十立方メートル分の海水を地球から持ち去ると、火星への一時移住を開始したのである。一方的な惑星資源の損失に彼らへの非難の声は高まったが、知性間に置ける大規模戦争にいたらなかった事への安堵感も大きかったためか、自体は予想された程の国際問題とはならなかった。

それよりも、彼らは大きな遺産を残して去ったのだ。宇宙進出に置ける数々の技術や地球内部の拡散資源情報、また同時にこれから人類派生の知性体を得るためのアプローチなど、これにより人類の太陽系脱出は二百年早まったとも言われている。

現在、広義人類も含めたほとんどの知性体の生息域が旧クジラ座のタウ星の巡航ステーションに移っている事からも、それは明らかであると言えるだろう。余談ではあるがそこには節足生物によって作られた都市型の碑文も残されており、今は遠い彼らの行く末を知るための資料として宇宙史博物機構による厳重な保護を受けている。